

津波の逃避体験

下町吉水義夫(72歳)

寒い雪の降る夜などは、炉端で祖母は水に漬けて凍ったじゃがいもの皮むきをしながら昔話をしてくれるのだった。

油断できない。津波はまたいつかくる。地震がゆったら、赤沼山へ逃げろと教えてくれた。大正の終り頃の話になる。祖母の言うことは、赤沼山は低いようだが、寝ている牛なのだから、津波がくると立ちあがって高くなると教えてくれたが後に大館山がある。

「ねうし」だと話していたが。

井戸の水、川の水も引いてゆくとも教えてくれた。明治の津波を田老での体験はない。生まれが藤原だったので藤原は津波は安全地帯と言いつづけていたのか。

閉伊川の津波の模様を話していた。

祖父は沖の漁に出て、朝かえったら、家も妻も流されておった。大きな地震がなくとも29年の明治の津波はきていると教えられたが、昭和8年の津波では、浜へ漁にさがった漁師の人達が潮の引く異状をみて「水がひけた、水がひけた」と叫んで、浜より逃げてくるその声に驚き津波だと直感、赤沼山に逃げた。

祖母の教えと漁師の人々の知らせで、命が助かったと思っている。

津波の避難は日頃の津波に対する注意と、襲来時の通報の2点が人的被害を防ぐものと8年の津波体験より得たのだった。

私は新聞少年だったので、赤沼山への避難道路は津波のくる前の晩も歩いてしたが、避難場所、避難道路は常によく見ておくことが大切である。避難する時駐在所の処まで電燈がついていた。赤沼山に入ってから爆風と同時に真っ暗闇になったが、その時、青白い光が前方を照らして、本道路をゆかず、山の斜面の薪の切り株に取りすがって、高台にのぼったが、後になって、お会いした地震学の今村博士も、津波の際ある発光現象だと話されたが、あの光のおかげで廻り道しないで真っ直ぐに高台にあがることができた救いの光でもあった。廻り道をした人々の大半は浪にさらわれてしまった。